

雑誌『わかもの』と一九六〇年前後の日本共産党系青年運動 ——「民主主義」イメージをめぐる

島 村 輝

〔要旨〕

『週刊わかもの』『グラフわかもの』『わかもの』は、一九五八年に創刊され、一九七一年まで発行されていた、日本の青年向け雑誌である。当初の主幹はぬやま・ひろしであった。ぬやまは終戦直後、日本共産党の文化問題に関しての権威とされ、「ダンス至上主義」「歌う（踊る）共産党」と呼ばれる運動を主導した。そのぬやまが、日本共産党五〇年分裂問題の一定の決着後に、自ら旗振りとなって創刊したのが『週刊わかもの』である。五〇年代後半から七〇年代初頭まで、途中中国の文化大革命に対する意見の相違によるぬやまの日本共産党除名をはさんで、この雑誌が時代の転換期における日本共産党系の青年運動のなかで、どのような「民主主義」イメージをプロパガンダしていったのか、実際の誌面などを参照しながら考えてみたい。

1、戦後青年運動と「ひろし・ぬやま」

若者よ、からだを鍛えておけ
美しいこゝろが逞しいからだに
からくもさゝへられる日がいつかは来る
その日のために、若者よ
からだを鍛えておけⁱ

戦後に一世を風靡した「うたごえ」運動において、ある時期までそのテーマソングのようにして唄われた「若者よ」ⁱⁱは、戦中に投獄され、一一年間の獄中生活を非転向のまま送ったかつての日本プロレタリア作家同盟書記長、西沢隆二が戦後出獄から日を経ずして出版した詩集『編笠』に収録された、この一篇を原型としている。作者「ひろし・ぬやま」は、戦後当初、西沢が

ⁱ ひろし・ぬやま「若者に」『詩集 編笠』一九四六年、日本民主主義文化聯盟、一〇二頁。引用にあたっては、旧字体は新字体に改め、仮名遣い等の表記は出典原文に従うことを原則とする。以下の引用も同様。

ⁱⁱ 歌曲としてのタイトルは「若者よ」。作曲は関忠亮。一九四七年、ゾルゲ事件犠牲者追悼集会に参加のため、新協劇団・青年グループ制作のコーラル・ポエム「愛情はふる星のごとく」の中の曲として使われた。曲を付すにあたり、歌詞の一部の順序が入れ替えられている。

名のつたペンネームである。西沢がこのペンネームを使うにいたった経緯については、彼自身が何度か記しているⁱⁱⁱ。この筆名を使用しているころ、西沢は日本共産党の文化問題に関しての權威の立場を得て、声楽家の関鑑子とともに「うたごえ」運動を提唱、また同時に文化政策において「歌と踊り」を活動に結びつける独特の運動を展開した。終戦直後の自由な雰囲気と解放感のなかで、西沢が主導したこの方針は広範に受け入れられ、都会や農村のいたるところでダンスパーティが開かれるなど、後に「ダンス至上主義」「歌う（踊る）共産党」と揶揄的に呼ばれるほどの大衆性を一時的に獲得するところとなった。

その後朝鮮戦争とそれに伴う米ソ両陣営の対立の激化、日本共産党の「五〇年問題」による分裂といった出来事を背景に、西沢はペンネームの表記を「ぬやま・ひろし」と改める^{iv}。この頃は、分裂した共産党指導部の一方が北京に渡って組織した「徳田機関」の一員として、彼が日本を離れていた時期^vにあたり、「一九四七年から一九四九年に至る三年間」のように「ほとんど毎日、多い日には、日に三度も四度も」^{vi}講演を行うというような活動は、不可能となっていた。

日本に戻った西沢は「ぬやま・ひろし」^{vii}のペンネームを用いて、新しい青年運動の組織化を企てる。その運動の柱となったのが、「わかもの社」から出版された『週刊わかもの』、および改題され月刊となった後継誌『グラフわかもの』であった。『グラフわかもの』の編集主幹であった一九六六年一〇月にぬやまは日本共産党から除名処分を受け、刊行母体であった「わかもの社」からも絶縁される。以降『グラフわかもの』およびさらに改題された『わかもの』は、少なくとも表面上はぬやま色を一掃し、日本共産党の意向を強く反映する形で休刊（事実上の廃刊）まで推移することになる。

このように『わかもの』三誌は、ぬやまと日本共産党との関係、ぬやまによって組織化された雑誌読者会と日本共産党直系の青年運動団体である日本民主青年同盟との関係、その他長期にわたる刊行期間中の背景事情の変化などを反映して、刊行主体の政治的スタンスなど、時期によりその内容や形態に大きな違いがある^{viii}。またそうした事情から、創刊から休刊（廃刊）にいたるまでの全ての発行号を通覧することも、今のところできない状態となっている^{ix}。筆者は国会図

ⁱⁱⁱひろし・ぬやま「私はなぜ“ひろし・ぬやま”と書くか?」「理論家と詩人」『青年運動における愛情の問題』日本青年共産同盟出版部、一九四八年三月、八五～九〇頁。

^{iv}ぬやま・ひろし「あとがき」『青年運動における愛情の問題』一九五六年四月、三一新書、一八二～一八三頁。

^v日本共産党中央委員会『日本共産党の七十年』党史年表によれば、西沢は徳田球一とともに一九五〇年八月に北京へ渡航。帰国は一九五五年とされる。

^{vi}注ivに同じ。一八三頁。

^{vii}これ以降の西沢隆二については、基本的に「ぬやま・ひろし」「ぬやま」と表記する。

^{viii}その変化の最も大きなものは、一九六六年一〇月一三日付日本共産党中央委員会総会名で布告された「西沢隆二の除名に関する決議」（『赤旗』同年同月一四日付掲載）、およびその後の日本共産党と西沢との激しい対立であるが、その詳細については稿を改めて別に論ずる予定である。

^{ix}この一連の雑誌を最も多く所蔵する国立国会図書館でも、『週刊わかもの』は二巻四八号～三巻五一号（一九五九年一月～一九六〇年一二月）、『グラフわかもの』が四巻二二号～七巻一一号（一九六一年七月～一九六四年一月）、一〇巻一～九号（一九六七年一月～九月、うち五巻と七巻二、六号は欠本）、『わかもの』が一〇巻一〇号～一四巻五号（一九六七年一月～一九七一年五月）の所蔵にとどまっている。なおこの三雑誌は改題されても巻次を継承している。

書館が所蔵する『わかもの』三誌を総覧するとともに、同館の所蔵しない四巻一七号（一九六一年四月二三日）、一九号（同年五月七日）、八巻六号（一九六五年六月一日）を独自に入手して閲覧した。本論文では、ぬやまが編集の主幹として創刊から書き続けてきたコラム「働く若者よ、誇り高く」の連載執筆を、共に編集に当たってきた島一平に引き継ぎ、その執筆分の全てを三部作の単行本として出版した時期を中心にして、これらの雑誌が時代の転換期における日本共産党系の青年運動のなかで、どのような「民主主義」イメージをプロパガンダしていったのか、実際の誌面などを参照しながら考えてみたい。

2、「働く若者よ、誇り高く」——ぬやま・ひろしの描いた青年運動戦略

「働く若者よ、誇り高く」は、『週刊わかもの』創刊当初からぬやま・ひろしが書き続けていた連載コラムである。このコラムは『グラフわかもの』と改題されて月刊誌となって以降も、第五巻三号（一九六二年三月）まで書き継がれ、以降は島一平（しま・いっぺい）が引き継いで執筆を担当している。先に記したような事情により、これらのコラムすべてを初出誌に当ててみることは現在のところできていないが、連載後に順序を改め、ぬやま作の詩篇などを加えた三部からなるコレクションが、単行本として刊行されている。第三部の「あとがき」には「この第三部で、私が、いままでに書いた“働く若者よ、誇り高く”は、ぜんぶ単行本になりました」と記されており、この記述を信ずる限りでは、ぬやま執筆のこのコラムの全貌を知ることはできるといえるだろう。

この『働く若者よ誇り高く』単行本第三部には「青年運動に関する覚書」という文章が収録されている^x。これは『週刊わかもの』『グラフわかもの』による青年運動三年間を、この時点でぬやま自身がどう総括しているかを知るという点で、注目に値するものである。この三年足らずの期間に、当初一〇〇〇人を切るころから出発した読者は、三万人となった。ぬやまはそれを「一応の成功」と総括し、その原因として①読者を、中学を卒業して、いきなり社会に出て働いている、十五歳から二十歳ぐらいまでの“働く若者”とその母親に限定したこと、②定価を一〇円という安価に設定したこと、③黨員および党外芸術家や文化人の協力が、非常に広範囲にわたって得られたこと、④「歌って、踊って、笑って、友情を深めよう！」を合言葉に読者会を組織したこと、の四点を挙げている。第一、第二、そして第四の原因については後に考察を加えるとして、まずは第三の原因とされている点について、実際の誌面に当たってみることにしたい。

『週刊わかもの』時代の一九六〇年（巻次は第三巻）、本誌に登場した芸能・芸術関係者は、以下のような多数に上る。

一号	一月三日	ゆきむらいずみ
三号	一月一七日	石原裕次郎

^x ぬやま・ひろし「あとがき」『働く若者よ誇り高く 第三部』わかもの社、一九六二年三月、一五六頁。単行本『第一部』グラフわかもの社、一九五九年一二月刊行。同『第二部』グラフわかもの社、一九六一年五月刊行。全て単行本書名では「働く若者よ」と「誇り高く」の間に読点はない。

^{xi} 初出は『前衛』一九六一年一〇月、七五～八三頁。

一一号	三月一三日	有馬稲子、今井正
一五号	四月一〇日	早乙女勝元、江原真二郎、佐久間良子
二三号	六月五日	河原崎長十郎
二六号	六月一九日	コロンビアトップ・ライト
二七号	七月三日	中原ひとみ
二八号	七月一〇日	吉行和子
三〇号	七月二四日	乙羽信子
三二号	八月七日	淡島千景、家城巳代治
三三号	八月一四日	江利チエミ
三四号	八月二一日	松山善三
五〇号	一二月一一日	宇野重吉、奈良岡朋子

この年は戦後史上の大きな節目として、日米安全保障条約改定反対闘争、三井三池争議の最中あたり、夏以降に芸能・芸術関係者の登場が少なくなるのは誌面の都合上そうした記事を相対的に増やすなどの配慮や措置が行われたためと考えることができようが、それにしても相当な頻度で掲載されているといわねばならない。これらの記事はすべてぬやま・ひろしの対談、インタビュー形式となっている点も、興味深いところである。

『グラフわかもの』ではどうだろうか。改名され月刊となった四卷二二号（一九六一年七月）号から、コラムを島一平に引き継ぐ直前の五卷三号（一九六二年三月）までの分についてあたってみよう。

七月号	坂本九（グラフと対談）、岩下志麻、羽仁進、吉永小百合
八月号	松島トモ子（グラフ）、田宮虎彦、ミーナ・マッツイーニ、永井智雄、朝比奈愛子
一〇月号	加山雄三（グラフ）、ダークダックス（写真と文）、永六輔（対談）、新藤兼人、丸木俊子、広津和郎、
一一月号	芦川いづみ（グラフ）、レペシンスカヤ（グラフと対談）、三船敏郎
一二月号	伴淳三郎（対談）、三田佳子、加藤大介、桑沢洋子、山本薩夫、十朱幸代、楠トシエ
一月号	倍賞千恵子（対談と写真）、松山英太郎、市川染五郎
二月号	森光子（対談）、バベル・カントレック、浅丘ルリ子、園節子、坂本スミ子（写真）
三月号	藤木孝、村田貞枝、有島一郎、仲曾根美樹（写真）

週刊時代、また月刊のグラフ雑誌となってからも、当時注目を集めていた芸能人、芸術関係者らが多数登場している点は変りがない。ここでもぬやま・ひろしが、一手に対談相手となっている。また『グラフわかもの』に改題した際、「グラフ監修」として名前が挙がっているのは木村伊兵衛、土門拳、田村茂の三名である。土門の名は六二年一月号までであるが、木村伊兵衛、田

村茂の監修はその後も続き、これら写真界のビッグネームたちの作品は本誌のグラフとして度々掲載されている。

これら芸能・芸術関係の著名人を起用したことに対し、ぬやまに反対する立場の人々から「彼は、女優とばかり対談している。近代主義者だ」という批判があり、それに対してぬやまは「青年戦線を分裂させようとする策謀」であるとし、さらに「同時に、ある程度のヤキモチもあったろうと思います」^{xii}と記している。

そこでぬやまが記しているように、特に当時注目的であった芸能関係者たちは、各種メディアからのオファーが多く、大変な重労働を強いられていたこと、その多くが貧しい階層の出身で、世に出るまでの苦労の時期があったこと、そうしたこともあって、同世代あるいは年少世代の働く若者たちに対して、愛情を注ぐ態度があったことが、彼／彼女らの協力を得ることができた理由としてあったことは、一面の真実であっただろう。また、読者たちと世代の変わらないスターたちが、ざっくばらんな素顔の面を見せるような対談は、そうした「アイドル」（当時まだこの言葉は使われていないが）たちに親しみを感じさせ、読者の興味を引き付ける要因があったことも間違いない。その意味でこれらの対談記事は、同時代の一般メディアを通じてなされていた「ヒーロー／ヒロイン」作りに便乗し、その一翼を担う動きの中にあっただとみることもできる^{xiii}。対談相手やインタビューアールとして毎回登場するぬやまが、そのような「ヒーロー／ヒロイン」のプロデューサーとしてのイメージを身にまとい、若者たちにとってのカリスマ的ポジションを獲得していくという経過を、その動きに重ねることも可能であろう。また、芸能人たちの側からすれば、少なからぬ青年層に対して影響力を持つぬやまという人物のカリスマ性を、大衆的人気獲得の道筋の一つとして活用するという思惑も、当然あったことだろう。

そこには運動の側からする、戦略としての大衆的「ヒーロー／ヒロイン」の起用と、芸能人の側からする人気拡大の方策、その両者を通じて結果的にもたらされる、ぬやま・ひろしのカリスマ性の増大という事態が発生し、「ある程度のヤキモチもあったろうと思います」という認識を、ぬやま自身も持つほどであったということになろう。そこにはきれいごとにとどまらない、運動における「民主主義」と「個人」の問題が隠れているのである。

3、「劣等感のかたまり」——ぬやま・ひろしのとらえた「働く若者」像

次にぬやまが「一応の成功」の要因として挙げている、第一と第二の理由について検討を加え

^{xii} ぬやま・ひろし「青年運動に関する覚書」前出『働く若者よ誇り高く 第三部』、一四三頁。

^{xiii} こうした「ヒーロー／ヒロイン」作りの動きについて、成田龍一は次のような指摘をしている。

ご存知の『平凡』という雑誌があります。この時期の『平凡』は五〇年代の代表的な雑誌として、歌謡曲と映画、スターと歌手を軸に編集され、五〇年代半ば以降からは雑誌を挙げて国民的ヒーロー、ヒロインを作り上げていきます。当面はヒーローで、ひとりは銀幕のスター・石原裕次郎、もうひとりは皇太子。この二人が五〇年代後半の『平凡』のなかに繰り返し登場し、話題の中心となっている。(略)映画や歌謡曲と結びつきながら、活字メディアが軸となりヒーローを作り出していくやり方、および人々の中でのヒーロー、ヒロイン待望の土壌が開拓されていればこそ(次の段階で)電波が機能を果たしたと言えるのではないのでしょうか。(内海愛子・島村輝・成田龍一「座談会 一九五五年体制が創り出したもの／隠したもの」『社会文学』第三号、二〇一一年二月での発言。二〇頁。)

てみたい。読者対象と考えていた「中学を卒業して、いきなり社会に出て働いている十五歳から二十歳ぐらいまでの“働く若者”」を基本的にどのようなに見ていたのかについて、ぬやまは次のように記している。

中学をおえただけで、社会に出て働いている若者は、いちばん数が多くて、しかも、いちばんつらい、苦しい暮らしをしいられています。

しかも誰からもかえりみられないで、心の中は劣等感のかたまりのようになっています。

民主的出版物はアカハタをふくめて、こうした若者や、その母親たちにはむずかしすぎます。

こうした若者たちにとって、ただ一つの心のよりどころとなる出版物といえば“人生手帖”だけでした。

私たちは、こうした淋しい若者たちに手をさし延べようと決心しました^{xiv}。

一九六〇年前後といえば、先述したように日米安保条約改定、三井三池闘争などを経て岸内閣が倒れ、交代した池田内閣による「高度成長」路線がはじまろうとする時期に当る。

戦後ベビーブーム世代（現在の「団塊世代」）が義務教育を終了し、そのかなりの部分がそのまま社会に出るという状況であり、高等学校、さらに大学への進学は、まだ誰にも手の届くところにあるというものではなかった。そうしたなかで、まだ幼いといってもいい年代で社会の荒波にもまれることになった若者たちの内心の状況を、ぬやまは「劣等感のかたまりのようになっている」と捉えている。

これは後に除名処分を受けた後、日本共産党の側から「青年をばかにしたみかた」^{xv}「かれらの健康な生活力を見ようとしない誤った考え」^{xvi}という批判を受けることになるが、もう少し丁寧にぬやまの見方の根拠をたどってみると、この考え方は、表面的な文言以上の奥行のある思考を背景としていたことを否定できないと思われる。そのことは『週刊わかもの』創刊当初の時期の「働く若者よ、誇り高く」のコラムなどに、端的に見出されるだろう。

単行本『働く若者よ誇り高く 第一部』の冒頭近くの各節には、当時の若者たちの「劣等感」の原因の、ぬやまによる分析がかなり克明に述べられている。労働の現場にいる若者たちが、学歴、職種、職場での配置などさまざまな要因から、現実には差別的な待遇を受ける事態となっていること、そこから彼／彼女らが「劣等感」を持つのは、ある意味で仕方がなく、その背景には資本主義社会における労働の疎外という事象のあることなどが、ぬやまの分りやすい文章によって、解き明かされていっている。批判的立場から見れば、このような説明は「一面的」であり、不正確なものともいえようが、先の引用中でぬやまが「心の中は劣等感のかたまりです」で

^{xiv} ぬやま・ひろし「青年運動に関する覚書」前出『働く若者よ誇り高く 第三部』、一四〇～一四一頁。

^{xv} 広谷俊司「西沢隆二の恋愛論、青年運動論はどういうものだったか」『赤旗』一九六六年一月四日、五頁。

^{xvi} 北村耕「ぬやま・ひろしの卑俗な「大衆性」(上)——青年の要求を“あそび”にすりかえる考え方——」『赤旗』一九六六年一月四日、六頁。

はなく「心の中は劣等感のかたまりのようになっています」としていることに注目しなければならないと思う。

ぬやまは当時の釜石製鉄所の従業員たちの子弟のうちで、成績優秀な者が進む、会社設立の技術教習所のシステムを例にとり、次のように述べている。

中学時代には、成績の良かった子供たちが、教習所に入所し、成績の悪かった子供たちが普通高校に入学する。

そして数年後には、頭の悪い方が監督する側に立ち、頭のいい方が、監督される側に立つ。

職員のほうが、出世も早いし給料もいい。ボーナスを貰って見れば、職員の方が、札たばもたっぷり入っている。

この場合、若い労働者たちは、いずれも腹の中が煮えくり返るような思いがするでしょう。

そして、上役におべっかを使って、なんとか出世しようとする考えになったり、あるいは働くことがバカバカしくなったり、ヤケになったり、卑屈になったり、けっきょく、労働者としての誇りが失われてゆくわけです。

これが資本家の打ちふるドレイのムチです^{xvii}。

ここには、若者たちは本来そのような「劣等感」に苛まれるべきではないこと、そうした「劣等感」がもたらされるのは、歴史的・社会的条件によっており、個々の若者たちの責任とはいえないこと、さらにそうした「劣等感」は動かしたい必然の苦しみではないということが書かれていると読み取るべきだろう。これらのコラムを読んで、まさにそこに当時の「淋しい若者たち」が「働く若者」としての自らの境遇に希望を見出すことができたという点は、この頃の状況からして、十分に納得のいくものである。雑誌『わかもの』を軸とする青年運動が、少なくない若者の支持を得た要因に、そこに彼／彼女らの内心の状況に対する、共感できる説明がわかりやすくなされていたことを、やはり第一の要因として挙げなければならないと思われる。

続いて第二に挙げられている、頒価を一〇円という低価格に設定したことについて検証してみよう。一九六〇年の平均一世帯一か月の収入と支出は、政府の統計によれば以下のように発表されている。

実収入	四万〇八九五円
可処分所得	三万七七〇八円
実支出	三万五二八〇円
消費支出	三万二〇九三円
食料費	一万二四四〇円
被服費	三九三四円

^{xvii} ぬやま・ひろし「若者たちよ、しっかりしなさい」前出『働く若者よ誇り高く 第一部』、六五頁。

住居費	三一三九円
光熱費	一五五二円
雑費	一万一〇二八円
非消費支出	三一八七円
実支出以外の支出	一万一四八二円
貯蓄	五六一五円 ^{xviii}

『週刊わかもの』読者層の経済生活についてのぬやまの認識は、以下のようなものである。

十代の働く若者たちの経済生活というものは、じつに驚くほど貧しいものです。

組織された労働者の場合は、それでも、まだいい方です。靴屋や、家具職人の徒弟、中華そば屋の出前持ち——といった人たちになると、昔の徒弟制度そのまま、一日十六時間ずつ働いて月給五百円（住み込み）という若者や娘もめずらしくありません。

これは、余談ですが、最近、私は熊本に行きました。演説会のあとで座談会が開かれました。

出席した娘さんたちに、一人一人、私は、給料をきいてみました。組織労働者の場合、だいたい八千円から一万円までです。ところが、靴屋の店員をしている娘さんだけは、通勤で五千円でした^{xix}。

一九六〇年の大学卒初任給は一三一〇〇円であり、経済生活の面でまず端的に、先に述べたような、学歴による格差が発生していることがわかる。『週刊わかもの』の定価が、当時の国鉄の初乗り運賃（一〇円）と同額、少年マンガ雑誌類の三分の一から四分之三（『週刊少年サンデー』三〇円、『週刊少年マガジン』四〇円）と安価に設定されたことで、低所得の勤労青少年層が手にしやすくなっていたことは明らかといえる。

経済的にも、社会的・文化的にも「優位」の側にあった大学生たちに対し、ぬやまが同年代の中卒勤労青少年に接する態度について述べている言葉を引用しよう。

なにしろ、ここに集まっている人たちは、みんな、中学を出ると、そのまま、職場に入って、働いている人たちだ。だから知識の点からいっても、理解力の点からいっても、大学生より確かに低い。しかしこの人たちは、自分で働いて生きている。自分が生きてきただけでなく、生きた社会をささえてきている。そこには、大学生にはわからない悲しみや、苦しみがあるし、また、それを乗り越えて生きてきたたくましさがある。大学生はまず、この労働者の苦しみとたくましさを理解しなければならない。

その上で話しあうなら、労働者と学生との間に、美しい友情が生まれるだろう。

そうでないと、労働者は、海の中で泳いでいるのに、学生は、岩の上に腰かけて、泳ぎ

^{xviii} 総務庁統計局編『家計調査総合報告書・昭和二二年～六一年』総務庁統計局、一九八八年三月。

^{xix} ぬやま・ひろし「青年運動に関する覚書」前出『働く若者よ誇り高く 第三部』、一四一頁。

方の講釈をするようなことになってしまう^{xx}。

こうした記述を含むコラムを読んだ『週刊わかもの』読者たちが、自分たちの立場をよく理解してくれた上で、大学生たちを諭し、溝を埋めて共同できる方向を提唱してくれるぬやまに対し、敬愛の念を抱くことは自然であろう。後にのやまのとった政治的行動を批判する立場から、これらのことばを、働く若者たちの支持を集めるためのマヌーヴァーであったとばかりとらえるのは、公平を欠くことになる。ただ、結果的には、経済的格差を、社会的・文化的格差と不可分のものと捉え、中卒勤労青少年の側に立って運動を展開することで、ぬやまが彼／彼女らの間に、運動の指導者としての個人崇拜にもつながるような、カリスマ的な人気をさらに得ることとなったのは事実である。そしてそのことが『週刊わかもの』『グラフわかもの』誌を基軸とするぬやま流の青年運動の「民主主義」的性格に、一定の否定的要素をもたらしたことも、今日からみれば否めないといえるだろう。

4、「ウタガキ運動」の思想——ぬやま・ひろしの夢みた自由への道筋

ぬやまが『わかもの』運動「当面の成功」の理由として挙げた第四の要因「読者会の組織」は、第一から第三までの要因の発想に深く関連し、その根本を支える、いわば彼の思想的基盤を物語るものという点で、とりわけ重要なものである。彼自身が述べているように、その中心となるスローガンは「歌って、踊って、笑って、友情を深めよう！」という、字面だけを見ればきわめて他愛ないともとれるようなものであった。

ぬやまはこの「歌って、踊って、笑って、友情を深めよう！」というスローガンの意図するところを、次のように述べている。

私たちは“歌って、踊って、笑って”それだけで革命ができるなどとは、考えていません。

しかし、未組織労働者はもとより、組織労働者の中にさえ、歌も歌えない、踊りも踊れない、笑顔も忘れた、ひとりぼっちの淋しい若者が、どれほどたくさんいることでしょう。

この若者たちから、歌うよろこび、踊るよろこび、笑うよろこび、友達をつくるよろこびを奪い去る権利は、誰れにもありません。(略)

ひとりぼっちで、毎日劣等感にさいなまれて貧しく暮らしている若者たちが、あっち、こっちから集まってくる。

歌って、踊って、笑って、男の子は女の子の友達を作り、女の子は男の子の友達を作る。

ただ、これだけのことが、どれだけ貧しい若者たちの胸に、生きる勇気をよみがえらせるかできません。つまり、貧しい若者たちが、生きがいを感じるようになるわけです^{xxi}。

このぬやまの発想は、本論文冒頭に紹介したような、彼自身が率先して提唱し、やがて正式な方針として労働組合や大衆を巻き込んで一時は熱狂的な気運を醸し出した、戦後日本共産党の

^{xx}ぬやま・ひろし「俺たちもみんなのために働くよ」前出『働く若者よ誇り高く 第一部』、四八頁。

^{xxi}ぬやま・ひろし「青年運動に関する覚書」前出『働く若者よ誇り高く 第三部』、一四五～一四六頁。

「歌と踊り」を格別に重視する文化運動方針を、青年運動という新たな意匠と組織形態のもとに、再生させたものといえよう。この「ダンス至上主義」が採用された経緯やその影響についての詳細な検討は別稿に記したところであるが^{xxii}、「歌って、踊って、笑って、友情を深めよう！」というこのスローガンが、決して一時の思い付きで掲げられたものではなかったということに注意する必要がある。

「働く若者よ、誇り高く」の中には、この「歌って、踊って、笑って」ということの意味が、具体的な事例をもとに何度も力説されている。その一例を見ておこう。全国を巡ってフォークダンスを勧める運動の意義は、民族的な文化を引き継ぎ、革新するというだけではない、大事な急所がある、とぬやまは説く。

それは、若者と娘さんが、手と手を取り合って、目と目を見つめてニッコリ笑うということです。

これは、まことにたあいがないことのように思われます。

しかし、じっさいに、目と目を見合わせてニッコリ笑おうと思うと、どうしても笑えません。(略)

自分で自分の眼差しさえ自由に動かすことができない。

これはいったいどういうわけでしょう^{xxiii}。

その理由として、ぬやまは「自分の意志」で行動する力が弱いこと、「自分で責任をとる」勇氣を持ち合わせないことを挙げ、そこに「独立した人格」といえるものがないという。

民主主義国家とは、独立した人格を持つ人間が集まって、相談して、自分たちにとって都合のいい社会秩序を作りだした国家のことです。

ですから、日本をほんとうの民主主義国家にしようと思ったら、働く若者の一人一人が、独立した人格にならなければなりません。

いままで、見えないところから、働く若者たちを監視していた主人のソクバクから、自分自身を解放することです。

自由な人間になることです。

これはたやすいことのものであって、じっさいにはむずかしい問題です。

しかし、このむずかしさを乗り越えなければ、働く若者たちは自由な人間にはなれないでしょう^{xxiv}。

先に検討したような、若い労働者たちの置かれた状況と、そこからもたらされた内心の「劣等

^{xxii} 島村輝「山村を揺るがした「ダンス至上主義」——「静かなる山々」と戦後日本共産党の文化戦略」坪井秀人編『戦後日本を読みかえる2 運動の時代』第一章、臨川書店、二〇一八年七月、三～三一頁。

^{xxiii} ぬやま・ひろし「自由な人間」前出『働く若者よ誇り高く 第三部』七〇～七一頁。

^{xxiv} 同前、七二～七三頁。

感」による苦しみの認識を併せて見るなら、これは当時の低学歴若年労働者たちの多方面での「疎外」状況、およびそこから脱却の道筋を、「歌って、踊って、笑って」というわかりやすい事象を通じて語った言葉ととらえることができるだろう。ここで核となっているのが「民主主義」と「自由」である。歴史的に束縛された「疎外」状況から「自由」になることが「民主主義」の獲得の大前提だということである。それは容易な道筋ではないが、そのような「自由な人間になること」を怖れてはいけなと、ぬやまは呼び掛けている。

その具体的な方策として、ぬやまは「うたがき」の発想を提唱している。

若者たちは、まず、胸の中に喰い入っているドレイ根性を拭い去ってしまうことです。おびえた気持から立ち上ることです。

みんなで力を合せて、その努力をしておかなかつたら、温かい友情も、さわやかな恋も、一生知らずにすごすことになるでしょう。

昔の人は“うたがき”を作って、歌ったり踊ったりしたといます。

今の若い人たちも、とにかく、一週に一度だけはみんなで集まって、できるだけ大きな声で話し合うことです。歌うことです。踊ることです。どうしたら、一週に一度、愉快な“うたがき”が開けるか、そのことについて、みんなで知恵を集めることです^{xxv}。

ここでの「うたがき」は、古代日本の慣わしを現代に再生させ、そこに親や子ども、家族らを巻き込む、疎外から脱した、あらたな人間関係の構築の方策として提唱されている。

では、ぬやまは疎外からの脱却のイメージを「うたがき」の再生に求める発想を、どこでどのようにして獲得したのだろうか。

終戦直後に刊行した『詩集 編笠』に、「ウタガキ運動 ((UTAGAKI-MOVADO))」という一篇が収録されている。

昔の人はウタガキを作つて歌ひつ、舞ひつしたと云ふ。かの歌一字長し、^{わろ}悪し、かの歌一字短し、^{わろ}悪しなど云ひたるにはあらざるべし。歌面白く、節をかしく、舞の姿楽しくばよしとしたるなり。我々は今一度新しい観点からこのウタガキを全国的に組織すべきである。(略)

ウタガキ運動とは人間の生活感情を共産主義理論のもとに現実に即して再組織する運動のことである。

紫は灰さすものぞつば市の八十のちまたにあひし子や誰れ
たらちねの母が呼ぶ名を申さめど道ゆきびとを誰れと知りてか
かゝるうたにもまさつてさらに美しい歌が新しいウタカキの中から涌くが如くに生れ出
ずるであらう^{xxvi}。

^{xxv} ぬやま・ひろし「一週に一度は、みんなで集まって」前出『働く若者よ誇り高く 第一部』、一五四頁。

^{xxvi} ひろし・ぬやま「ウタガキ運動 ((UTAGAKI-MOVADO))」前出『詩集 編笠』、九八～一〇〇頁。

『詩集 編笠』の内容の詳細な検討と、詩人としてのぬやま・ひろしの評価は、現在準備中の別稿に譲ることとするが、少なくとも「うたがき」の再生という発想が、終戦直後に表明されていたことは事実である。そしてそれが、一年の獄中生活の中で養われた、文学的素養に根差すものであったことも明らかであろう。古代の人々が大らかに歌い交す場として夢想された「うたがき」のイメージこそ、ぬやま・ひろしが疎外からの脱却と自由獲得への方策として、その発想の基底においたものであり、一九六〇年を前後する『週刊わかもの』『グラフわかもの』を軸とする運動に若い労働者を惹きつける文化的魅力の一つだったに違いない。

5、一九六〇年代の『わかもの』運動——ぬやま・ひろしとの訣別まで、訣別以降

『週刊わかもの』『グラフわかもの』、そして連載コラム「働く若者よ、誇り高く」に記されたぬやま・ひろしのことばを軸として、一九六〇年前後の『わかもの』誌を基軸とする青年文化運動の一形態について検討を加えてきた。そこからは、終戦直後からの青年文化運動の歴史的規定性と、ぬやま・ひろしという特異な個性がそこで果たした役割の一端が浮かび上がってきた。「歌って、踊って、笑って、友情を深めよう！」という単純素朴に見えるスローガンが、いかに低学歴若年労働者たちを惹きつけたか、その理由もある程度明らかにすることができた。

これまでも述べてきたように、一九六六年一〇月、ぬやま・ひろしこと西沢隆二は日本共産党から除名処分を受け、永年基盤としてきた「わかもの社」からも絶縁されることとなった。共産党からの除名処分の経緯や、その後のぬやまと共産党とのやりとりについても、半世紀以上を経た今日から振り返ってみれば興味深い特徴を数々見出すことができるであろうが、それもここで論じることはしない。ただ、ぬやまの日本共産党からの除名処分があっても、『グラフわかもの』の「わかもの社」を母体とする刊行は継続された。ぬやまを失ったことが必ずしも『わかもの』誌に依拠した青年運動の直接的崩壊にはつながらなかったことの意味を考えてみる必要があるだろう。

実際のところ、ぬやまが『わかもの』運動の基軸とした「読者会」は六〇年代に入ってもさまざまな形態で自主的・創造的な展開を各地で遂げていった。ぬやま自身の加齢と、それに伴って主幹の地位を退いていたこともあり、彼の運動指導者としてのカリスマ性は、共産党除名の頃には相対的に低下していたと見られる。従って、ぬやまの共産党除名処分に伴って「グラフわかもの社」（当時の社名）が社告を出し、訣別宣言をしても、その影響は限定的なものに止まったといえる^{xxvii}。その名に「民主」を冠する日本共産党直系の青年運動団体「民主青年同盟」の指導と『わかもの』運動との関係の、それまでの一定の緊張を解消するような方向性が、ぬやまの除名を機に、共産党からの指導として強く示されたことも『わかもの』運動の消滅が回避された大きな要因であったことは否定できないが、それだけでは大衆運動団体としての継続はできなかった筈であるということを考え合わせておかなければならない。

本論文はもともとぬやまの共産党からの除名処分以降『わかもの』の休刊にいたるまでを含めた『わかもの』運動と、その中での「民主主義」イメージの変遷の総体を検討する予定であっ

^{xxvii} 「グラフわかもの社が社告 恥しらずな裏切り分子 西沢隆二（ぬやま・ひろし）らは わかもの社とは無関係」『赤旗』一九六六年一〇月一五日、三頁。

た。実際には『週刊わかもの』創刊から、「働く若者よ、誇り高く」をぬやま自身が執筆連載していた時期の『グラフわかもの』初期まで、一九六〇年を前後する僅かの間について検討するにとどまった。

さらに論ずるべき問題としては①編集の実質が島一平に引き継がれていく過程と、そこでの『わかもの』運動自体の変化、②ぬやまの共産党除名が『グラフわかもの』と『わかもの』運動にもたらした影響の実際、③ぬやまとの訣別以降の『グラフわかもの』『わかもの』の展開の過程と休刊（廃刊）までの事情、などを挙げることができよう。特に第三の問題については、一九六〇年代から七〇年代にかけての社会の変化、とりわけ「高度経済成長」の下での勤労者の経済状況や青年層の階層構成の変化との関係で、『わかもの』運動がどれだけのアクチュアリティを保ちえたのか、休刊（廃刊）となった原因はどこにあったのか、日本共産党の主導する青年運動は、どのような帰趨をたどったか、といったことの解明がある。

またぬやま・ひろしのその後についていえば、中国での「文化大革命」が、彼の発想法のどのあたりと共鳴する基盤を持っていたのかという点は、それまでの彼の中国コネクションの展開歴という角度からとはまた別に、考察されるべき点であろう。これはひとりぬやまのみの問題にとどまらず、「文化大革命」が掲げた方針の「反知性主義」的な特徴が、少なからぬ日本知識人、運動指導者らの共鳴を呼び起こしたこととも無関係ではなかろうと考えられるからである。これらを含めて、青年階層をめぐる運動論の大きな動きを明らかにするための作業を、今後も継続していきたい。

付記・本論文は二〇一七年六月二七日より三〇日まで、オーストラリア・ウーロンゴン大学にて開催されたJSAA (The Japanese Studies Association of Australia) 2017におけるパネル「Youth and Democracy in Post-war Japanese Literature」での発表を基に、加筆・修正を行って取りまとめたものである。

